

新美南吉記念館で開催している『赤い鳥』創刊100周年記念特別展「『赤い鳥』がくれたもの」新美南吉・夢と出会おう（10月28日）から、南吉が『赤い鳥』を通して出会った人を紹介する3回目。今回は童謡詩人の巽聖歌と與田準一をとりあげます。

\* \* \*

昭和6年9月、春から『赤い鳥』に童謡や童話が入選するようにになっていた新美南吉は、北原白秋門下の若手詩人たちによる童謡同人誌『チチノキ』に加入します。この時、出会ったのが、後に童謡「たき火」を書いた巽聖歌（明治38～昭和48）でした。

聖歌は、『赤い鳥』大正14年10月号掲載の童謡「水口」が、白秋から「おっとりしていいいい気品のある芸術童謡です。めずらしいほどこい。」と激賞され、同誌出身の若手詩人として注目されていました。

この年の暮れに初めて上京した南吉は、聖歌に伴われて白秋に面会します。感激した南吉は、聖歌の勧めもあり、

両親を説得して翌春から東京外国語学校に進学。はじめは聖歌の家に居候させてもらうなど、聖歌の支援を受けながら、東京での生活をスタートさせます。面倒見のいい彼は、南吉を物心両面で支え、南吉も「兄さん」と呼んで慕いました。

南吉との交流では、與田準一（明治38～平成9）も忘れてはなりません。戦後、童謡「小鳥の歌」を書き、岩崎京子、あまんきみこらを育てた児童文学者です。当時、『赤い鳥』の編集に携わっており、南吉が投稿した童話「正坊とクロ」（昭和6年8月号掲載）を最初に読んだのも彼でした。

聖歌と並ぶ『チチノキ』の中心メンバーで、大正期の童心童謡を脱してモダンリズムの影響を受けた新しい童謡を志向し、南吉もそうした前衛的な面から準一に惹かれていました。

聖歌と準一は、南吉が病で帰郷してからも彼のよき支援者であり続けました。昭和17年10月には、聖歌の世話で第一童話集『おぢいさんのラン

プ』が出版されます。さらに南吉の死後に出版された第二童話集『牛をつないだ椿の木』、第三童話集『花のき村と盗人たち』の企画も動き出していきました。それぞれ聖歌と準一が関わっていて、『赤い鳥』が縁で出会った二人の先輩が、こぞって南吉を世に出そうとしてくれたことがわかります。

\* \* \*

南吉は『赤い鳥』を通して、多くの人と出会いました。それは無形の財産となり、南吉を育て、作家として認められるきっかけを作ってくれたのです。



左：巽 聖歌（野村吉巳氏提供）



右：與田準一（與田準一記念館提供）

## アンケート

- Q1 今号でよかった内容や写真があれば教えてください。
- Q2 今号を読んだきっかけに行動したこと、または、したいことはありましたか。
- Q3 取り上げてほしい内容や企画、広報に関するご意見・ご感想などありましたらお聞かせください。

### 回答方法

住所、氏名、年齢、アンケートを書いて、ご送付ください。

### あて先

〒475-8666  
東洋町2-1 企画課  
Eメール  
kouhou@city.handa.lg.jp



いよいよ半田市地区路線バス「ごんくる」の運行が始まりました。表紙に写真掲載しましたが、3両はそれぞれ亀崎・有脇線、半田中央線、青山・成岩線を走ります。そして外観は、南吉童話をモチーフにしており、車両ごとにデザインが異なります。色も鮮やかなので、ぜひご自身の目で確認してみてください。路線も新しくなっているの、今までバスに乗っていなかったという方も一度バスを試してみたいかごしょう。

私も、今度飲みに行く際は、早速バスを使ってみようと思います。（浅野）

### 編集後記